# スマイル Pick Up!

市民の笑顔お届けします

## 噺と音色で多くの人を笑顔に

大久保 直繁さん(69歳)＝芳野町１＝
か代さん(70歳)

楽しく活動を続ける直繁さんとか代さん。「落語の面白さは、笑いの中に考えさせられるところがあることと年齢問わず楽しめるところ」と話す直繁さんは、スマートフォントラブルやいじめ問題などを子どもに楽しく考えてもらえるような落語を目指し、日々落語の研究・勉強に励まれています。

バイオリンの音色で癒しや和みを多くの方々に届けるか代さんは、「80歳になっても演奏を披露していきたいです」と幼いころから親しみ、心の支えとなってきた音楽の活動をこれからも続けていきたいと笑顔を見せていました。

現在は、コロナ禍で活動が制限されているお二人ですが、今後、お二人の前で、大声で笑ったり、楽器の音色に酔いしれたりする多くの方々が目に浮かんできました。

「昔からユーモア溢れる主人です」「妻のバイオリンで奏でる音色が好きです」とお二人の活動を仲睦まじく教えてくださった大久保さんご夫妻。

直繁さんは落語家「芳野亭笑翁」として、か代さんは、アマチュアの音楽グループ「MOーON(ムーン)」でバイオリンを弾く活動をされています。「趣味を持つ楽しさをお互いが理解し、支え合っています」と夫婦そろって生き生きとした暮らしをおくる理由を教えてくださいました。

## プログラミングの楽しさを伝えたい

松田 優一さん(44歳)＝平泉寺町赤尾＝

市内におけるICT人材の育成強化をめざして創設された勝山市ICT教育アドバイザーに委嘱された松田優一さん。福井市でソフトウェア等の企画開発を行う会社を経営しています。これまでも、市内の小学校においてプログラミング教室を実施し、たくさんの児童にプログラミングの楽しさを伝えてこられました。

今回の委嘱によって、市内の小中学校に通う全ての児童に対し、プログラミング教育を提供することが計画されています。市内小中学校に配備されているパソコンを「インプットだけではなくアウトプット」できるようバランスよく活用し、「子どもたちがどのようにしたらアウトプットできるようになるのかを伝えることができたら」と今後の構想を練られている様子でした。

コロナ禍によってライフワークであるプログラミング教室は全て中止になってしまい、週末は自宅で過ごすことが多くなったそうです。「庭でまき割りをしたり、４人の子どもたちとゆっくり過ごしている」と柔らかな笑顔で語る姿から、家族との時間を大切にする父親の顔を垣間見ることができました。

松田さんのICTに関する専門的知見によって、教育にとどまらず地域づくりや行政事務など幅広い分野でICTが活用され、わたしたちの生活がより便利になるワクワクするような提案を期待しています。



# JCHO-Column

## HPV(ヒトパピローマウイルス)ワクチン

福井勝山総合病院
小児科部長　森　夕起子

今回はHPV（ヒトパピローマウイルス）ワクチンについての話題です。

子宮は女性にある臓器です。精子と卵子が出会い、受精が成立すると子宮内に着床し、約10か月かけて胎児が成長していきます。

子宮頸がんは子宮の出口にできるがんで、HPVの感染により生じます。子宮頸がんは若い女性にみられます。日本では毎年約1万人がかかって、約2800人が亡くなっています。30歳までにがんの治療で子宮を失ってしまう（妊娠できなくなってしまう）人も、毎年約1200人います。

このHPV感染を予防するのが、HPVワクチンです。HPVワクチンは、小学6年生～高校1年生までの女の子は、定期接種として公費で接種を受ける事ができます。「うちの子には、まだ早いかも？」と思われるかもしれませんが、性交前の女の子に接種することで、高い予防効果が期待されています。

HPVワクチンは平成25年に定期接種が開始されましたが、ワクチンで通常生じうる局所の痛みや発赤・腫脹や疲労感以外に、長期に及ぶ全身の痛みや手足の動かしにくさといった副反応疑いが報告され、問題視された歴史があります。現在ではこれらの一部は、ワクチン接種ストレス関連反応と考えられています。当日の緊張や不安に加え、元来痛みに弱い体質や過度の怖がりなどの体質も関係しているようです。

HPVワクチンは、小児科・内科・婦人科で接種可能です。小さいころからワクチンや健診で受診している「かかりつけ」で、いつもの先生にリラックスした状況で接種をうけられてはいかがでしょうか？副作用についても相談しやすいでしょう。

なお、定期接種年齢をこえても接種を受ける事ができます。この場合は実費になります。

また、ワクチンを受けても20歳を超えたら2年に1度は子宮頸がん健診をうけましょう。

# ふるさとを訪ねて

## ～地域文化を掘り起こそう～ ㊹

市史編纂室　山田　雄造

### 下荒井隧道と隧道図

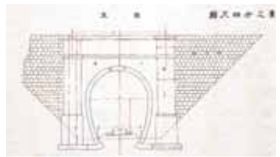
京都電灯は越前電機鉄道の名称で電鉄敷設を出願し、明治43年(1910)10月認可が下りた。しかし軽便鉄道法の公布で、翌年6月全面改訂（例えば下荒井の迂回路は300間の隧道（トンネル）工事に変更）の命を受け、11月に再申請、翌年認可され3月から本格的工事に着手した。福井ー大野口間の開通は大正3年(1914)4月であった。

いくつもあった難題の一つが隧道工事で、一か月の経費が1500円、人夫賃の上昇などもあり工事を急がねばならなかった。下荒井隧道は結局36間(約65m)の短縮した迂回路に変更（申請時のトンネル開通は大正13年5月）された。2本の隧道の内中島隧道は大正2年4月までに開通、下荒井の方も同年中に完成した。

写真は短縮路の方の下荒井隧道で幅は2・65m、高さは4・5mである。使用された期間が短いためか当時のままの状態で残る。石は九頭竜川の石が用いられ荒島岳産の閃緑岩とのことである。

笠川喜多右衛門家に「越前鐵道株式会社　軌道図…」と表題があり、車輌・停車場・貨車・客車図など24枚（部分図は110）を描いた図面が残る。図はそのうちの「隧道図　正面」である。恐らく再申請した際の設計図と考えられる。主任技術者菅原恒覧とあり印が押されている。菅原は明治から昭和初期にかけて鉄道・土木業界で活躍し、土木界の改革者と言われた人物で丹那トンネル工事に関わった。当時の笠川家の当主は衆議院議員であった笠川継孝で、何らかの関係で手に入れたのであろう。

下荒井隧道



隧道図正面